

---

# 悪人儀人

パンサー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪人儀人

### 【Nコード】

N5294P

### 【作者名】

パンサー

### 【あらすじ】

中学の時書いたのでよくおぼえてません

(前書き)

中学の時に書いた文なので多少中2病ぽいところがあるかも？

悪人、儀人

悪は、どこに潜んでいるかわからないクラスの中に必ずいる。いや友達だと思っていたやつが悪かもしれない私は、誰を信じ、誰をしたい、誰を信用すればいいのかわからない私が信用している人は、ごくわずかだ、その人たちもさいきんでは、信用できなくなってきた。

悪には、たちむかわなければならぬ。

だが私には勇気がない悪は、複数いて必ずしも集団で襲いかかってくる。

私は、その複数に立ち向かうことができないのだ。

悪は、やることがひきょうだ、クラスのぎょうじで自分の意見を権力や仲間を使い自分の意見を押しそうとする。

だが悪は、いざ一人になると何もできない、人間として小さいからである。

悪によってこのクラス、この世界が腐っていく。

悪には、自分が何を言っているかすら自覚がない「殺す、死ぬ」という言葉を平気で吐き攻撃してくる。

私は、思う「殺す、死ぬ、」という言葉は吐くのは、実に簡単だ、だが実際にその者が死んだり殺されたらどうするだろう。

じぶんの発言に責任をとれるか？とれるはずがない悪は、まるで責任能力のない子供なのだ、いくら勉強ができて人間としてできていなければ人間失格。

私は、言いたいそんなに死ぬ、死ぬ言っているのならば自分が死ぬばいい、それでこの世から消える。

お前らさえいなくなれば世の中がよくなる。

いつけん過激な発言かもしれないが実際悪は、いなくなったほうがいい

自分が完璧でなくせして人のことを馬鹿にし楽しんでる悪ども  
お前らは、馬鹿にされる人間の気持ちを理解できるか？

気持ちを考えられないくせに愛だの言って結局は、人を傷つけ死に  
追いやる。

そんな悪たちには、愛のかけらもない悪に目をつけられた儀かわい  
そうだ結局かいつの道がな自暴自棄になり自殺する。

悪が死なず儀が死ぬまったくおかしな世の中だ

そんな悪どものせいで自分の人生だめにすることはないこれは、き  
れいごとかもしれないがクラスの中にも世の中にも儀がいるだが  
悪もいる。

自分も儀のなかに入ればいいんだ、儀は、集まったら正義になる。

悪は、集まっても悪にしかならない

「君は、どちら側の人間？」かと聞かれたら困ってしまう自分では、  
どちらの側の人間か分からないができることなら正義でありたいそ  
れには、勇気が必要だ

私は、正義は、こうあるべきであると思う人の短所を責めずその人  
間の長所を褒め困っている人間がいたら見て見ぬふりをせず手を差  
し伸べ世の中を汚している悪がいたらその悪を削除する。

私は、正義とは、そうゆうものだと思っっている。

私が信頼しているひとたちは、正義であってほしい。

だがクラスに5、6人ほどしかない

儀が少ないため悪ともかわるだが私は、悪とは、あまりかわり  
たくない悪と一緒にいれば必ず私も悪に教養され悪の一部となつて  
しまい人を馬鹿にし楽しむような人間になってしまい人間としてダ  
メになる。

世の中どこにでも害となる存在がいる。

私は、人間でありながら人間のことがよく分からない

これは、体調が悪かった。ある日の国語の話し言葉の意味を調べる  
勉強があり電子辞書を使おうとしていて

隣の人から

「辞書かして」と頼られました。

これから使うので断りました。

意味を調べていると周りからこういふ会話が聞こえてきました。

「貸してくれなかった?」

「うん」

初めなにを言っているのかえよくわかりませんでした。

「私の辞書貸そうか」

「電子辞書じゃなきゃだ」

きづきました第一の悪と隣の人は、さっきの話しをしているのでした。

「つつこみがまじめすぎる」

「前の席隣でけっこう無視する。」

などの会話が聞こえてきました。

私は、信頼していない人間とは、あまり会話をしたくは、ありません。

「あいつテスト絶対カンニングしてた。」

途中で第二の悪が話しに加わりました。

「わかる」

第一の悪が大声をあげました。

「そうだよねあいつ絶対見てた。」

体調が悪いうえ自分の批判を聴いたせいで、ますます顔が熱くなりました。

もちろん私は、カンニングなどおろかなこういは、していません。

私は、その日朝から体調が悪く気分がすぐれなかったためテストを受けているあいだおちつきがなかったように周囲から見られていたんでしょうが実際にカンニングしていたのは、第二の悪です。

私は、知っています。第二の悪が英語の単元テストのときに机に単語を書いてそれを見ていたということ。第二の悪は、悪の中でも最低いわる屑です。

いやひよっとしたら悪全体が屑なのかもしれません。

第二の悪がくわりそれから会話の内容もエスカレートしますます過激になり私は、話を聞いていないようにふるまっていました。

「いつもささいなことばかり話してくる。」

「キャハハ」

周りからよくいわれます。「ささいなことにこだわりすぎ」だとですが私にとつては、大きなことなのです。

第二の悪がどういふことをささいでは、ないことなんて私には、分かりません。人間一人一人価値観のずれがあります。

「わかる前席隣で話していることがびみよーすぎてつまんない」

「俺もあいつそつだもん前あいつと近くの席でちょーヒマだったもん」

そうです私は、面白みに欠けている人間です。

悪たちは、こんなくだらない私になにを求めているのでしょうかまったくわかりません

くだらないと思っていたら初めからかわらないでいただきたいくだらないと知っておきながら話しかけわたしの批判をする。

最低です。

私は、悪たちのおもちゃは、ありません

調べるのをやめ私は、電子辞書の中に入っていた人間失格を読むふりをし悪たちの会話に聴き耳を立てていました。

私の近くに第一の儀が来ました。

儀に話かけられましたとたんに悪たちの声がやんだのです。私の話を聞こうとしていたんでしょうか？

第一の儀に「どうしたんですか？」と聞かれたので起こった出来事を話そうかとも思いましたが悪に聞こえたとあとあと気まずくなるだけなので、ただただ第一の儀がどこかに行くのを待ちました。第一の儀がどこかに行きまた悪たちの会話が開きました。

「アイツみんなに嫌われてるもん」

嫌われていると言う言葉がグサつとききました。

そのあとの二、三文は、よく聞き取れませんでした。

「あいつの近くでヒマだったからkとしゃべってた。でもkなんか面倒死ねって感じたかった。」

隣の傍観者

「すぐ死ねは、よくない」

「マジうざい死ね」

「ハハハハ」

「死ね、死ね」

私は、第二の悪は、ウケだけのために死ね、死ねと連発しているだけだときづいた。

そんなに女にかまってほしいのかとひそかに思った。

傍観者と第一の悪は、女です。

結局傍観者も悪に教養され騒いでいました。

また私の近くに第一の儀が来ました。また会話がやみました。私は、また第一の儀がどこかに行くのを待ちました。

また再び会話が再開されました

「あいつ変だし髪でかいハハ」

「さあハハハ」

そうです私は、変で髪がでかい

私は、一年のころを思い出していた。

ほぼクラの全員から髪を変った目で見られ批判を受けていました。

第二の悪は、その中の一人です。

私は、被害から逃れるためすべての悪と距離をおき先生とも相談しました。

もう表向きには、その話題は、出なくなり解決したかにみえたが実際どうだったのか分かりません。

第二の悪ともそれ以来普通に接してきた。

二年三年とクラスが一緒になり第二の悪に一年のころなにもなかったようにふるまっていたがもうそれもやめにします。

時間がたって儀になったかと思っただらやっぱり悪は、悪だった。

よく馬鹿は、死ななきゃ治らないなどと言われますが

本当に死んでも治らないのは、悪です。次から次へとわいて出てくる。

授業が終わるまでずっと悪たちは、私のことについて話していました。

話していた内容は、思い出せません。

悪は、私の目の前でよくもまあべらべらと私に聞こえてないとも思っているのでしょうか？いや私にわざと聞こえさせている？

実に醜い私に面と向かってよからぬところを注意してくれるぶんには、かまいませんそれで怒っていたら私は、悪だ。

だが間接的に話しをし、そのことういに対して私は、人間の醜さを感じこんな醜い人間たちが嫌いになりました。

授業が終わり体調がすぐれなかつたので保健室に第一の儀と行つたが「昼たべてからもう一回こい」と言われた。

帰つた。

教室のドアが閉まつており教室には、入りずらかつた。

第一の儀がドアを開けてくれたが教室には、入りたくなかつた。なぜなら悪たちと顔を合わせ食べなければいけないからだ。

私が教室に入り席に座ろうとしましたがなかなかそれができず別の席にどうしていた。

女に許可をもらいその席に座っていました。

食べ物を食べようとしてしまいましたが体調が悪いせいでなかなか箸が進みませんでした。

昼食の時間が終わり国語の時間のことを第二の儀に話しましたがけつきよく解決の道は、なくただたんに私の話しをしているだけでした。

悪には、天罰が下らなければならぬもし下らなければ誰かが裁きを下すしかない

だがそれすらできないのだ

このような話ならいくらでもあります。

第一の悪には、学活の時間に

「お世話になった先生たちにありがとうメッセージを書こうと思います。」

第二の悪は、先生をけなしているくせにありがとうメッセージ書こうと言いつつ始末おまけに

「担任にビデオレターを作りたいと思うんですがいいですか？賛成の人は、挙手願います。」

みんな手を上げなかったというより野放し状態だったので話しが聞こえなかったせいだと思う。いきなり

「みんな聞いてビデオレター作りたいたいんだけど」

第二の悪の周りに複数の傍観者が集まり

「ビデオレター作るってことでいいですね」

「いいです。」

勝手にきめられた。

第二の悪が後ろの私にきづき

「ビデオレター作ることになったんだけど意見ある。」

私は、ハッキリ言った

「劇」

「まじめに考えてください」

とわたしの意見を無しし言われました。だから作らなくていいんだよと心の中でそう思い

しばらく黙っていました。悪は、なんだか私に対してぐちぐち言っています。第二の悪の言っていることは、よくわかりませんが適当に返事をしました。

「あーはいはい」

私は、きずきました。カメラなどの機材は、どうするのかと思いきつて私は、悪に

「カメラとかは、だれが持ってくるの」

「あの人を持ってくる」

持ってくる人は、第三の儀でした。

第三の儀は、機材を提供してくれるそうです。

数日後私は、ビデオ撮影をしなければなりませんでした。

いやいやながら黒板の前に二人の儀と並びその質問にひたすらこたえるだけの単純な動作

「クラスのみんなに一言」

クラスのみんなに一言？内を言っているんだ内心答えたくなかった。

「第一の儀ありがとうと答え」

「いやクラスのみんなに一言だから」的なことを言われ

「ありがとうと答えた」

質問は、これをふくめ合計三つで全部同じ答えにした。

何日があつたある日第三の儀が困っています。

悩みを聴くと

「デジカメの動画をDVDの焼くのが大変なんだよ」

第三の儀は、第一の悪とその傍観者いや悪たちにDVDを焼けと頼みこまれたようです。

第三の儀は、断ったそうです。

そのため私に火の粉が飛んできました。

「頼みたいことがあるんだけど」

だいたい予想は、ついていましたがいちよう聴きました。

「DVDに焼いてもらいたいんだけど」

ほらきた

「私にできる範囲のことならやる」

だが私に第三のぎができないことをやれと言われてもとつていけないことなので断りました。

「あんたコン部だったんでしょ」

逆切れされました。

コン部だからってできることとできないことがあります。

「じゃあ弟にたのむ」

私は、思いました。

弟は、このクラスの一員では、ない自分は、なにもせずただまわりの人間がするのを待っている。

だいたいこの企画には、第三の儀も私も反対だったのです。それをはん強制的に働かせようとする。

悪たちは、自分たちでは、できないことを思いつきほかの人にやらせる。

まったくバカな人たちだ

卒業前に何かを作りたい思いでを残したいという気持ちは、不思議に思いません。

しかしそれは、中学受験生でできるはんいのことです。

今やっていることは、それとは、違う本当にくだらないこと  
自分が楽しければいい自己中です

私は、知っています。悪と言う一文字を簡単に消せることを

私は、知っています。人は、助け合っているのでは、なく助け合っているふりをしていることを

私は、知っています。神などいないことを

私は、知っています。世の中きれいな事を言う権力者たちが自分たちの都合のいいようにルールを作っていることを

私は、知っています。権力者たちのルールに弱い者は、だまされ働かされているということ

私は、知っています。その権力者たちも子供時代があったことを

私は、知っています。完璧では、ない大人たちが権力者を育てたと  
言うことを

私は、知っています。私自身も完璧の存在でないことも  
私は、知っています。私は、完璧では、ないまま大人になることを

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5294p/>

---

悪人儀人

2010年12月16日19時06分発行